

エロエロ

誘惑お嬢さまが
恥じらう時

小説 筆祭競介
挿絵 浅沼克明

立ち読み版



序 章

結婚を前提にエッチしよ♥

006

第一章

お嬢さま生徒会長は肉食系!?

010

第二章

お口で剥いて♥ 胸で挟んで♥

056

第三章

誘惑お嬢さま+初体験Ⅱ恥じらい模様?

106

第四章

ヤキモチの後は、一生懸命A舐め奉仕♥

139

第五章

猫耳メイドは僕専用!

171

第六章

女の道は、激甘イチャらぶデレうぶエッチ♥

215

終 章

お嬢さんになってくれる?

252

登場人物紹介

Characters



私をお嫁さんにしたくなるような
エッチで気持ちいいことしてあげるね♡

なな み ばた

七海旗あかり

有名商社の社長令嬢。成績優秀でスポーツ万能、さらに絶大なカリスマ性も兼ね備えている。三人の姉に教えられたエロテクで拓弥を狙うのだが……？

ゆう き たく や

悠木拓弥

ごくごく平凡な男子学生。実は日本を代表する大財閥の血筋なのだが、本人は知らない。



彼女の舌は迷うことなくこちらの舌を捉え、ぬるぬると絡みついてくる。

「！」

気持ちいい。

舌と舌が触れあうと、脳に直接砂糖をブチ込まれたような甘い快感が広がる。それをもっと味わいたくって顔を傾ける角度を深くし、互いの唇をより嵌めあわせるようにした。

——レロぬちゅ、くちゅん、れろぐちゅんちゅうううっ。

互いに舌の接触面積を広くしようと動きを合わせ、時には同じような円を描き、時には舌先を絡ませたまま互いにクンクンと引きあう。糖度の高いドロドロでヌルヌルの肉悦が、二枚の舌がそうして絡みあうことにより次々と量産されていく。

「んんっ♡ もっと、むちゅっ、てへ——んんんっ♡」

キスしたまま彼女が漏らす吐息も、今まで以上に甘い。

このままでは脳味噌が、官能の砂糖漬けになってしまう。

甘い肉悦を求める以外に、何も考えられなくなってしまう。

「っぷふ——あは♡」

その前にあかりが一旦顔を引いてくれた。

拓弥がポーッとのぼせた顔で憧れの先輩を見詰めていると、桃色に頬を上気させたまま、おでこをコツンと密着させてくる。

「今のキス、そんなに気持ちよかったの？」

まるで内緒話でもするように小声で囁かれた。

大人びたドレス姿に色っぽい上目遣いが加わり、拓弥は胸をドキーンと大きく跳ねさせられて、コクンと頷くことしかできない。

「今度は、こっちを気持ちよくしてあげるね♥」

こちらの股間に手袋に包まれた細い指が伸びてくることも、今の拓弥はトロンとした顔のままポーッと眺めていることしかできない。

試着室の真ん中で突っ立ったままファスナーを下ろされ、下着の前ボタンを外されて、びびん！

と勃起ペニスを取り出される。

初ディープキスの激甘な肉悦で、すでに充分漲ってしまっていた。

あかりはそれを優しく手にしながら小首を傾げる。

「あら？ また元に戻っちゃったの？」

前回、口で完全に剥いてもらったが、常時は皮を被ったままだし、フル勃起をしても自然には剥けない。今も亀頭の半分ほど皮を被っている。

つまりまだ仮性包茎だった。

「もう、しょうがない子ね♥ とりあえずお口で剥いてあげる♥」

男の包茎は女の口で剥くのが常識だと言わんばかりに、あかりは拓弥の前で膝を折った。

（ああ……こんなに綺麗な七海旗先輩があ……）

惚れた女が美しくドレスアップし、自分の前に自ら跪く。
ひざまず

その光景だけで少年が陶然となるには充分なのに、

「今日は剥く前にイッチャだめよ♥」

何の躊躇もなく桜色の唇をかぱっと開き、包茎ペニスを咥えようとしている。

その視覚的な興奮と、精神的な喜びが若いペニスをさらに漲らせ――。

「つくうう！」

肉先が生温かなヌメリに包まれると同時に、全身がビクンと硬直した。

彼女に咥えられるのはこれが三度目だが、気持ちよさの鮮度はまるで落ちない。

たまらず愉悦の聲が漏れ、ここが服屋の試着室だということを思い出し、慌てて口を手

で押さえる。

なにしろあかりの口腔奉仕には遠慮がない。

今日も唇で男根のくびれ部分をしっかりと絞り込みながら、熱い唾液を亀頭と包皮の境目にまぶし込むように舌を躍らせてくる。

（せ、先輩のトロトロの唾が、おちんちんに染み込んでくるうう）

ただ、今までと違い、拓弥は一度剥けていた。

それだけに、あかりが口腔粘膜でねっとり包み込みながら、軽く顔を上下させると簡単にプリンと亀頭は露出する。

「あッッッ!!」

最も敏感な亀頭の裏側が熱い唾液に浸されて、大会議室の時と同じように顎が大きく仰け反った。剥き出しの快感神経を直接マグマに浸したような、灼熱感を伴う肉悦が眉間へと鋭く突き抜けていく。

それでもアツという間に暴発しなかったのは、一度これを経験していた賜物だろう。

「んちゅん——これでいいわね」

対してあかりは皮だけ剥くと、あっさりとペニスを口から出してくれた。

最も敏感な肉器官が熱い口腔粘膜から解放されて「はふうう」と脱力の溜め息が漏れる。しかし肉体と精神を緩和できたのは、ほんの束の間だった。

「あ、あの……何しようとしてるんですか？」

先ほどまで自分の前に跪いていたお嬢さまが膝立ちの姿勢になり、大胆に開いている胸元のスベースへ、手にしたペニスの先端を合わせようとしていた。

「君のおちんちんを、この中に入れようと思ってね♥」

悪戯っぽい笑みを口元に浮かべながら碧眼をニイッと細める表情は、彼女が完全に肉食モードになった時の顔。髪をアップにして大人びたドレス姿をしているだけに、その表情

はいつも以上に妖艶に映る。

「うふふっ♥ パイズリって知ってるかな♥」

「ば、ばい、ば」それぐらいの知識はあるけれど——「ふえっ!？」

あかりはこちらの驚きにお構いなく、胸元の編み紐スペースに勃起ペニスを差し込もうと身体の位置を調整している。

「ち、ちよっと待ってください。そんなことしたらドレスが汚れちゃいます」

「いいわよ別に。もうこのドレス買うってさっきの店員さんに言ってるから。この前の私のお顔と同じように、好きなだけ君のでドロドロにしちゃっていいよ♥」

処女とは思えない彼女の大胆さに唾然とさせられるのは、これでいったい何度目だろう。しかしポカンとしたまま固まる少年の態度を、あかりは別の意味に取ったのか、

「あら？ ひよつとして君、おっぱいに挟まれるのが嫌な人なの？ せっかく瑠璃子姉さんに、いろいろな挟み方教えてもらってきたのになあ。こんな風に♥」

あかりは小悪魔的な上目遣いでこちらを見上げながら、

——たぶたぶユサユサたぶたぶたぶたぶっ。

自らの乳房を両手で下から持ち上げて、小刻みに揺さぶってきた。

その姿は弱腰な牡を誘惑する、発情期の牝そのもの。

あるいは小動物を、魅力的な餌で釣る肉食獣か。

「い、いろいろな、って……」

その煽情的すぎる光景とセリフに思わず、ごくんと喉が鳴る。

拓弥の女性の胸に対する興味は至って人並み。特別、巨乳が好きだというわけではない。しかし、あかりのバストに挟んでくれるとなれば話は別だ。

「……あ、あの……ぼ、ぼく……」

が、はつきりと口で「パイズリしてください」とは恥ずかしすぎて言い出せない。

結果、顔を真っ赤にして腰を前にクンと出し、剥けたばかりの勃起ペニスを彼女の胸元に差し出すこととなった。

「あらあら♥」

対してあかりは瞳を細くし、罨にかかった獲物に対して満足げな笑みを浮かべている。

「それじゃあ遠慮なく君のおちんちんを挟んじゃうから、しっかりと楽しんでね♥」

改めてドレス姿のお嬢さまが上半身を寄せてきた。

ペニスの根元を掴まれ、彼女の唾液で濡れ光る肉先が胸元の編み紐の隙間に入り――。
ずにゆん、と二つの乳房に丸ごと飲み込まれる。

「ふああ……」

柔らかな牝肉に、男根を根元から先端まで隙間なくぴゅちりと飲み込まれた快感に、絞り出すような喘ぎ声が漏れた。

「す、すごいですコレ……先輩のおっぱいが……僕のを全部……」

それはどこまでも柔らかく、まるで全身を丸ごと包み込まれたような心地よさ。自然と口が半開きになって、唇の端からだらしなく涎を垂らしてしまう。

「ああん♥ そんなに気持ちよさそうな顔しちゃつてえ♥ オチンチンもとっても熱くて硬いわよお♥ うふふふ♥ それならコレはどうかなあ？」

あかりが掌でグツと自らの乳房を谷間方向に寄せあわせながら――。

ズニユズにゆずりゆずにゆだぶたぶだぶつ！

先ほどのデモンストレーション張りに、バストを激しく揺さぶってきた。

二つの丸い膨らみは、谷間方向に潰れながら丸く柔肉を溢れさせている。

それが左右違ったタイミングで卑猥にブルブルと揺れまくる。

「くふああつ！ あふああああつ！」

その狭間に埋まる男根が、中でどれほど揉みくちやにされているかは言うまでもない。

あかりの両手が上下する際、中のペニスにねじれるような圧力がかかり、左右の手がすれ違いざま横に並ぶ一瞬だけは、肉棒全面に均一な圧力がムギュとかかる。

（気持ちいい！ フワフワでタプタプのおっぱいでズリズリされてすぐ気持ちいい！）

口で皮を剥いてもらった際にたつぷりとまぶされた唾液の効果で、痛みやひっかかりはまるでなく、乳房の狭間でなめらかに扱き上げられ続ける。

「ああ！ 先輩のおっぱいが！ おっぱいのタプタプがヌルヌルでズリズリでええええ！」
張りつめきった剛直を、張りつめた乳肌に激しく捏ね上げられて喘ぎ声が止まらない。
「そんなに大きな声を出したら、店の人に聞こえちゃうよ？」

あかりに小声で注意されて、拓弥は慌てて自分の口を両手で塞いだ。

そして彼女も左右別々のタイミングで激しく揺すっていた両手の動きを止める。

気持ちよすぎて喘ぎ声を我慢できない自分に遠慮してだろうか、と思う間もなく肉食系お嬢さまは次の行動に移った。

「やっぱりドレスを着たままだと、おっぱいの可動範囲が狭いのよね」

「ふえっ？ あ、いや……その……」

自分のサイズを考えると、十分に可動範囲内で収まっているのだが……。

するとあかりがやけに悪戯っぽい表情でこちらを見上げながら、ドレスの胸元を摘まむ。

「えい♥」

そして、いきなり下乳部分を覆っていたドレスを自ら捲った。

「うわあっ!？」

直後、特大の白い果実がたぶんたぷんと続けて二つ、勢いよくまろび出る。

（や、やっぱり先輩のおっぱい、すごく大きいッッ！）

拓弥の前に跪きながらも、姿勢よく背筋を伸ばしているだけに、ドレスのカップから解

放されると乳房の丸みが僅かに下がる。

しかしそれは類いまれなビッグサイズ故の自然の摂理。

若々しい肌の張りにより下乳は美しい球面を保ち、それでいてずっしりとした重量感も併せ持つ絶妙のたわみ具合を見せている。

（そ、それに……ち、乳首があんなに……）

どちらの頂点も鮮やかなピンク色で、触って確認するまでもなく一目でピンピンに勃起していることがわかる。

あかり本人もこの乳奉仕で感じてたんだ。

そう思うと、さらにその乳房の前でそり立つ男根が漲った。

「あは♥ 君ももっと元気になったみたいだし、私のおっぱいも自由に使えるようになったから、次はもっと気持ちよく挟んであげるね♥」

そう言う彼女の声も拓弥に負けぬほど「はあはあ」と甘く弾み気味。

それは先ほどもでの激しいパイズリ行為のためなのか、乳首同様、自らの谷間で直に触れている男の漲りで感じたためだろうか。

（どっちにしたって、今の先輩……反則的なぐらいに色っぽすぎるよぉ）

宝石のような碧眼はジッと拓弥を上目遣いに見詰め、頬は妖艶な薄紅色。髪をアップにしているために、細いうなじも官能的な桜色に火照っているのが丸見えだ。

しかし、お嬢さまの艶姿にぼーっと見惚れている余裕はない。

あかりは自らの膨らみを指をいっぱいにかいてワシ掴み、少し膝で歩いてその深い谷間に勃起ペニスを合わせて――ずにゅんッッ！

一気に押し挟んできた。

「はくうううう！」

必然的にその中心に置かれた肉棒に、特大バストの質量全てが一気に集中。

先ほどの揉み挟みとは明らかに違う強烈な挟まれ方に、鋭い愉悅の吐息が漏れてしまう。

「やっぱりドレスを着てない方が、ハードにズリズリしやすいわね♥」

しかも追い打ちをかけるように、お嬢さまが自分の胸を強く挟んだまま上半身ごと動き始めた。膝立ちの姿勢で脚を使い、上半身ごと豪快にバストを上下させてくる。

（こ、こんなに強くおっぱいでズリズリされたら、す、すぐにイッちゃうよお！）

それはペニスの全快感神経を極上の柔らかさで圧迫されたまま、先から根元まで何度も抜き抜かれる行為そのもの。肉棒全面を捏ね上げていく柔らかな肉悦がダイナミックに上下して、気持ちよさのレベルが半端ではない。

「くっ！ つっつ……くふううっ！」

拓弥は両手で口を押さえ下唇を噛みしめながらも、激しく喘がされる。

とにかく全身で踏ん張る。そうしなければ、今すぐにでもイッてしまう。

仁王立ちしている両膝が暴発を防ぐためにガクつき、情けない内股になり出していった。たまらず視線をあかりに向けようとして下を向き——拓弥は両目を見開かされる。

視線が釘づけにされたのは、やはり彼女の胸元だ。

二つの膨らみの頂点が、先ほど以上にはっきりと勃起していた。

（せ、先輩も……パイズリでやっぱり感じてたりするのかな？）

しかしこちらを見上げる妖艶な美貌には、いつも拓弥を襲ってくる際に浮かべている肉食獣の笑みが見え隠れ。細められた碧眼は、官能的にうっとりしているのか、獲物の反応に満足しているのか判断できない。

（で、でも、できれば先輩にも感じてもらいたい！）

そう思い、もうイキそうなこともあつて勝手に腰がヘコヘコと動いてしまった。

「ああん♥ そんなに気持ちいいんだね♥ もう君のおちんちん、おっぱいの中で今にも爆発しちゃうそうなほどガチガチになつてるわよ♥」

指摘されるまでもなく、いつ爆発してもおかしくないとところまで追い込まれている。

——ズにゅん！ズリむにゅん！ずりゅズニユズにゅうん！

剥き出しの白い肩が大きく下がった時、ほんの僅か真つ白な胸の狭間からチラツと真つ赤な異物が見える。

（わわわっ！アレってやっぱり！）



自分のペニスだ。それはすぐに牝肉の海に飲み込まれ、その深さに比例した快感が情け容赦なく股間から迸ってくる。

（僕のと比較してみると、やっぱり先輩のおっぱいって凄すぎるよお！）

自分の大きさを考えると、あかりの乳房は贅沢極まりない特大サイズだ。

だからこそ竿肌から肉棒の芯に至るまで、満遍なくギュッと極上の圧力がかかってくるのだらう。股間から津波のように絶え間なく押し寄せてくるこの柔らかな肉悦が、いかにしてもたらされているかを、はつきりと視覚でも認識させられた。

（もう我慢の限界だよッッ！）

「イ、イクッ……イッちやいますッッ」

拓弥は極力小声で、とつくの昔に訪れていた性的限界をやつと告げる。

「いいわよ♥ 私のおっぱいで好きなだけドクドクしてね♥」

対してあかりはさらに身体を大きく上下させ、その類いまれな乳房の谷間でペニスの先から根元までを一気に擦り上げてくれる。

一際ダイナミックなその一往復に、拓弥はあっさりとトドメを刺された。

（この中で！ 先輩のこのおつきくて綺麗なおっぱいの中でッッ！）

ずっと我慢していた牡の昂りが腰の奥で爆発し、尿道の奥から凄まじい勢いで迫り上がってくる。そして深い胸の谷間から、真っ赤に充血した肉先がチラッと覗いたその瞬間。

ドリゅん！

白濁の弾丸は糸を引きながら真上に迸り——ぴちゃ！

「あん♥すごい勢い♥」

こちらを見上げるお嬢さまの細い顎の裏側に直撃した。

一直線に飛び出した大きな塊は、彼女の頬まで迸りの白い筋を走らせる。

ドグユドグドグどぎゅどぶっん！

しかし胸の谷間から噴出したのは、彼女の身体が大きく上下した際の初弾のみ。

射精を開始した直後にはパイズリ奉仕の動きをあかりが止めて、脈動する男根を乳房で強く挟み込んだまま動かない。

（くううっ！ おっぱいにギュッてされたままイクのって、すごく気持ちいい！）

男根全面を満遍なく柔肉に包まれたまま性欲を爆発させる快感は、本来、中出し射精でなければ味わえないものなのかもしれない。

それだけに脈動の愉悦はより深く、射精は長く激しく続いた。

「お口の中に出された時もすごい勢いだったけど、おっぱいの中でもおんなじだね♥」

あかりが言葉を喋るたび、彼女の顎の裏側にへばりついているザーメンがドロドロとその細い喉を滴り落ちていく。

（コレって……僕が出した精液なんだよね……）

何やら妙にモジモジした震え声でこんなお願いをしてくる。

拓弥は状況がよく飲み込めないまま、今までになかったあかりの可愛らしさに驚いて、反射的にガクガクと頷いていた。

「あ、あの……えと………た、拓弥くん♥」

少年が初めて名前で、二つ年上の婚約者に呼ばれた直後である。

あかりの身体が、再び雷にでも撃たれたようにビクンと痙攣。

その直後に「あふうっ」と妙に切ない溜め息をつく——。

「う、動いていい？ あ、あの、う、動くね。ああっ、拓弥くん！」

「わわわっ、せ、先輩ッッ！」

彼女はこちらの返事を待たずに動き出した。腰を大きく上下にゆつくりと。

「ああん……か、身体が勝手に、ふはあああん！ う、動いちゃって、す、すごい……拓

弥クンのおおへその裏側でゴリゴリして……あああああ！ 拓弥くうううん♥」

あかりが腰を振るタイミングに合わせて、拓弥クン、拓弥クン、と語尾にハートマークがついていそうな甘さで名前を連呼してくる。

（と、とにかく……先輩が僕との初体験で物凄く感じてるのだけは間違いないよね。……

だ、だって先輩のアソコ……すっごいトロトロのビクビクなんだもん！）

お嬢さまの急激な変化に対する戸惑いよりも、それに伴う乱れに対しての興奮が上回る。

——ぐちゅん、ぬちゅぐちゅ、ぬる、くちゅ、ずちゅん！

ロストバージンした直後はペニスを痛いほど締めつけていた膣の動きが、今はかなりなめらかだ。襷の一枚一枚が自ら肉棒に絡み、吸いつき、舐めていく。

それが連続して竿肌全面で行われ、まるで無数の舌の塊に男根を舐めまわされているようだ。二人の結合部分からこみ上げてくる、そんな初体験の肉悦に背筋がゾクゾクゾクと震え続け、自然と顎が仰け反っていく。

「ふああつ……な、七海旗先輩いい……」

剥き出しの性粘膜を直接交わりあわせている濃密な一体感に、少年の口からも愉悦の吐息がだだ漏れた。あああう、と甘く喘ぎながら官能で潤む瞳をあかりに向ける。

ただでさえ相手は自分よりも身長が高い。

そんな相手に馬乗りされて、下から見上げる光景はまさに圧巻だった。

（こ、こんな先輩、見てるだけでもスグにイッちゃうよお！）

あまりに豊かに実りすぎて、身体の動きから半拍ほど遅れて揺れるビッグバスト。

それとは対照的に、薄い腹筋を官能的にビクつかせている、細くくびれたウエスト。

躍動感溢れる上下運動を可能にしている太股と、履いたままのニーソックス。

制服の上着ジャケットを羽織ったままなのも、やたら目を引きエロティック。

そしてなにより——クチゅぐちゅズちゅん、ぬくちゅぐちゅずちゅつちゅ！

粘着質で湿っぽい音を盛大に響かせながら、拓弥を丸ごと飲み込んでいるアソコ。

赤色の淡い茂みは自らの愛液によってぬれそぼり、拓弥の陰毛と絡みあつては、透明な糸を何本も引いて粘りつく。

極めつけはさらにその奥だ。腰が上にいく際、ほんの僅かにはみ出すピンク色のビラビラが、まるでセックスの動きに合わせて肉棒にねっちょりと張りついているように見える。（だからオチンチンのでっぱりが、中でキュッって吸われるみたいになつてゐるんだ！）

その光景の生々しさは尋常ではなかった。

「ああん！　なんだか、恥ずかしいよお！　だから、そんな顔でわたしを見ちゃらめえ！」
激しく腰を振りたくりながら、あかりが叫ぶ。

「ふえっ!？」

対して拓弥が漏らしたのは驚きの呻き声。

恥ずかしい？

ファーストキスの直後ですら躊躇なく包茎ペニスをしやぶり、ぶっかけだろうと、口内射精だろうと、パイズリだろうと、なんでも平気でシテクれた――。

（あ、あの……七海旗先輩が？）

今は馬乗りしている拓弥に向けて、縋るような上目遣いをしている。

（ほ、本当に……は、恥ずかしがつてるの？）

今までのことを思えば、こう疑問をもつても責められないだろう。

なにしろ他の生徒がいつぱいいる会議中でも、平然と拓弥にエッチな悪戯をかけ、ぱつくんからごつくんまでした人である。

しかし耳の先まで真っ赤になっているのは、セックスによるものだけとも思えない。

「あん！ はああん！ ンはああああああああんッ！」

それでいて、あからさますぎる喘ぎ声を盛大に漏らし、腰の動きは加速気味だ。

形のよい眉が八の字に垂れ、眉間には官能的な縦皺が深く寄っている。

伏せ気味な臉から覗く瞳の色は、さらに悩ましい。

いつもの明るい輝きが、今は滴るほどの潤みに沈んでいた。

とにかくあかりの何もかもが、日頃の彼女とまるで違う。

（原因はよくわからないけれど……ほ、本当に今の七海旗先輩は……）

羞恥と肉悦——その二つに、何をするにも自己コントロールの利いていた彼女が、どうやらどつぷりと飲み込まれてしまっているらしい。

「い、今の先輩、めちゃくちゃ可愛いです！ す、すっごく可愛いです！」

惚れた相手にこんな姿を見せられて、興奮しないわけがなかった。

頭の奥で何かがカッと爆発し、気づいた時には激しく腰を突き上げていた。

ウエスト同様細くキュッと引き締まり、バストのように牝肉がたつぷりと詰まった蜜壺

今度は拓弥が、あかりのセリフで全身に興奮の震えを走らせる番だった。

「そ、そんな。あ、あの、それは——んぐううつ！」

躊躇のセリフを言いかけた少年の口が、上からお嬢さまの唇に塞がれる

驚きで丸く見開かれた拓弥のまさに目の前で、あかりは瞳をギュっと閉じ「んー、んー」と切なげな吐息と共に、ディープキスを繰り返して出る。

それはまるで「このまま中に出して」と声に出さずにおねだりされているような熱烈さ。拓弥も思わず舌の動きを合わせて、舌を淫らにねぶりあう。

そのまま上下の口で激しく交わっていると、膣内射精を咎める気など消し飛んでしまう。あかりは身体を前に折り曲げる窮屈な姿勢でキスをしながら、小刻みに腰を振り続けていたが「ぷふあっ！」と大きく息を吐くと共に、勢いよく身体を起こした。

「ねえ、私のこともっと好きって言って！ もっともっと好きって叫んでえええ！」

「ああ、好きです！ 七海旗先輩のこと大好きです！」

「名前で！ 名前だけで呼んで！ 私のことあかりつてよんでえええええ！」

「ああつ！ あかり！ あかり！ あかりいいいいいい！」

惚れた女に乞われるまま「好き」だと叫び、恋焦がれた先輩の名を呼び捨てで叫ぶ。そのたびに彼女の膣壁は、ペニスの締めつけを強くする。

男としての凄まじい優越感が、少年の小さな身体を満たしきり――。

「あああん！　たくやああああああ！」

自分の名前を何度も叫びながら、官能の汗を飛び散らせるあかりの姿が、肉欲のリミッターをブチ抜いた。

全身で渦巻いていた官能の激流が、腰の奥から一気に込み上がってくる。

「イクッ！　イクッ！　あかりッッッ！　あかりいいいいっ！」

思いつき腰を突き上げて、片思いをしていた女の最深部に己の先端を捻じり込む。

どギュどりゅんっ！

肉先から弾き出た精液がゼロ距離で子宮孔を突破し、凄まじい勢いのまま子宮壁に直撃。

「っひうっっ！」

あかりの腰が、初中出しの衝撃で僅かにフワッと上に移動した。

まるで墜壁に直撃したザーメンの勢いによって、女体が浮いたような光景だ。

どギュどりゅドドギュどぶどぶドブン！

続けざまに迸るザーメンも女の最弱点を打ち続け、それに合わせてビクンビクンと彼女の全身が弓反っていく。

「す、すごっ——んはあああ！　熱いのいっぱいですっ！　ああん！　ああっなんかくるううう！　わ、私もなんか出ちゃう！　ああッああああああああ！」

牡の脈動に合わせて今では顎が真上を向き、剥き出しになった細い喉が絶叫に伴い筋張



った。でたらめに痙攣していた薄い腹筋が、ヘソを引っ込めるようにヒクンと大きく波立
ったその直後――。

ぷしやあああああああああッ！

突き上げ続けていた拓弥の腰を押し戻すような勢いで、熱い飛沫^{しぶき}の大噴射。

（し、潮！ あ、あかり先輩が潮吹き絶頂してる!!）

自分のセックスで、惚れた女を性的クライマックスまで導けた喜びと興奮が、少年の射
精をさらに長引かせる。

上下で繋がる二人は互いの絶頂感を体液に変えて、互いの身体にぶちまけあった。

「っ……つくふあ……ふああっ……」

先に絶頂の息みを緩めたのは拓弥の方である。

ブリッジ状態だった腰を落とし、無意識に止めていた呼吸を再開させた。

僅かに遅れて、息んでいたあかりも深く甘い吐息をつく。

そして拓弥が突き上げた位置で止まっていた腰をストンと落とした。

「ああん♥」

結果、再びエクスタシー直後の蜜壺深くに男根を受け入れることとなり、あかりは甲高く喘いだ。両手を床について上半身を支えようとしたようだが、肘がガクつき、あつさりとこちらの胸の上に倒れ込んでしまう。

「あかり先輩……」「た、たくやクワン」

二人は絶頂直後の潤んだ瞳で見つめあうと、どちらからともなく唇を重ねあった。ねっとり舌を絡めあい、激しかった初体験の余韻を二人で最後まで味わう。

「……あのね。実はね……」

その後、あかりが拓弥の胸に頬を乗せてオズオズと語ったのは、先の話の真相だった。自分との婚約が上手くいかず実家での居場所がなくなりそうだと、というのは作り話で、やり手なお姉さんのアドバイスとのことである。

拓弥の性格を詳しく聞き分析したそのお姉さんは、今までのようにガンガン押して攻めるよりも、弱った所を見せた方が良く、と今回の攻略法を教えてくれたのだとか。

この話を聞き、自分が婚約を了承した直後に、彼女の態度が一変した事が得心できた。

「ごめんね。……騙すようなことしちゃって……」

「……い、いや、その……別にいいですよ……」

こうして好きだった人と結ばれることができたのだ。

むしろ拓弥の方が、そのやり手のお姉さんに感謝したいぐらいである。

「あ、あの……」

拓弥はポリポリと頬を搔いてから、顔を赤らめ視線を伏せて口を開いた。

「……今先輩……すっごく可愛くて……すっごく気持ちよかったです」

それが後ろからの衝撃に合わせて、びくんびくんと跳ねるように何度も痙攣。

突入に合わせた牝脂層の柔らかな縦揺れと、その奥にある筋肉群の快感による横方向のビクつきが、一つの尻の中で同時発生し始める。

（うわああ！ ス、スゴ……な、何これ？ エ、エロい、エロすぎるよおお！）

ブルブルびくびくと揺れる牝尻は、ケタ外れに官能的。

しかもその中心に潜む薄桃色の小穴が、一際淫らに尻肉が揺れると共にキュッキュツと皺を寄せるのだからたまらない。

膣壁たちの動きまでもがそれにシンクロし、眼下のアナルが窄まると同時に中のペニスも引き絞られ、眉間に突き抜けるような凄まじい愉悦が迸ってくる。

拓弥の下腹と、あかりの牝尻の打ちあう肉音の間隔が瞬く間に短くなっていく。

（このままだとすぐイッチャうよお！）

なにしろ元より性器同士の相性が抜群で、視覚的なエロティックさも申し分ない。

「ふにゃああん！ ご主人さますごいニャン！ もっともっとシテ欲しいにゃああん！」
加えて、この脳味噌が溶けそうなニャンニャン言葉による喘ぎ声。

先のミスコンからのイライラ&ムラムラ感もあり、拓弥自身が昂りきる。

駄目だ。このまま欲情の赴くまま一方的に性欲を満たしたら、もっと自分が嫌になる。
あかりはそれでもいいと言ってくれるだろうが、だからこそもっと自分を許せなくなる。

「……くっっ！」

少年は渾身の理性を振り絞り、一旦、ガムシヤラだった腰の突入を止めた。

それまで甲高い喘ぎ声を上げていた猫耳メイドも「はあっ♥」と甘い吐息を吐く。

「な、なんだか今日のご主人さま……いつもと違ってとってもワイルドだニャン♥」

と甘いセリフと共に再び上半身をよじり、あかりがこちらを窺ってきた。

官能的な頬の火照り具合と、細めた瞳の潤み加減が少年の獣欲をまた刺激。

こんなに魅力的な恋人を前にして、理性的であろうとすること自体がどだい無理だった。

「んにゃン♥」

気づいた時には、後ろから強く彼女を抱き寄せていた。

キスがしたい。

先ほどしたようなエロエロなディープキスを、バックで繋がったままでしたい。

そんな男としての本能が、拓弥に自ら踵を浮かせて精一杯背伸びをさせた。

それでも唇が届かないのが悔しくて、少年の胸をさらにムラムラさせる。

怒りやムカつきという感情は、男の獣欲を爆発的に促進させる効果があるようだ。

「あ、あはん……ご主人さまあ」

対して聡明な猫耳メイドは、こちらの意思を目敏く察知。少し窮屈な姿勢でもウエストを一杯にねじり、性器の結合を外さないまま顔を思いつきこちらに向けてくれる。

んちゅうううつ、と二人の唇が深く密着した。

直後に舌を差し込んで、少年は婚約者の上下の口を同時に貫く。

相手の性粘膜を剥き身のペニスで掻きまわすようにセックスしながら、口腔粘膜を同時に絡めあう肉悦は格別だった。

（アソコの中のこの辺りを強くズンって突かれると、舌がビクッてしちゃうんだ……）

しかも女体の新たな弱点を発見し、少年の興奮はさらに増す。

下ではとろみの強い蜜液に男根を絞られながら、上では互いの唾液を混ぜあわせるように舌を激しく絡めあう。

「んちゅう……あ、あはりい……んんっ、も、もつろお……あ、あはり……んんっ……」

貪婪すぎるキスにより重なるの乱れた口の端から唾液がタラタラと溢れ出る。本来、透明であるべきその筋は、二人の口内で念入りに何度も攪拌されたために白く泡立ち、粘っこく互いの顎へと滴り落ちていく。

「んっ、んんっ……」

あかりが姿勢の窮屈さのためか、舌を激しく絡めあいながらも、少し息んだような鼻息を漏らし始めた。

（ア、アソコの感じも、今までとちよつと違うよお）

肉棒を絞るヴァギナにもさらに捻る力が加えられ、膣襞たちが竿肌深く食い込み、こ

めかみを削り込まれるような肉悦が発生していた。

拓弥は構わず彼女のウエストを抱きしめていた両手を上げて——むにゅんっ！
バストを服の上から思いつきりワシ掴む。

「んんっ!？」

敏感体質な猫耳メイドは、こちらに負けないほど激しかった舌の動きを止め、小さく身体をビクつかせる。拓弥はペニスをきつく絞られている愉悦を発散するように、思いつきり豊かな膨らみを揉みしだき始めた。

こうして後ろから掴むのは初めてだが、前からとは一味違った揉み心地だ。

正面からこのビッグバストを掴むと手首に多少の負荷がかかったが（その重みも心地よかったが）この姿勢だとそれがない。自然に胸を揉みしだくことができ、指の深い埋まり具合と、掌にのしかかる重量感のバランスが絶妙だ。

こうして後ろからワシ掴むのがおっぱいの正しい揉み方なのかも、と意外なところで新たな発見をしてしまう拓弥であった。

（あっ。このコリコリしてるのって……）

服の上からでも、胸の突起がはつきりとわかる。

なにしろ今は立ちバック&ディープキスの真っ最中。

敏感体質の恋人が、乳首をピンピンにしていけないわけがなかった。

拓弥は一杯に開いていた指を中心に向かって絞り込み、きゅっと両乳首を摘まみ上げる。
「んんっ——んくふああっ！」

窮屈な姿勢で、ずっとディープキスをしていた猫耳メイドの唇がとうとう外れた。

それでも年上の婚約者は、身体をよじらせた姿勢のままジッとこちらを見詰めてくる。

「こ、このおっぱいは……た、拓弥くんだけのものだからね」

唐突にそれだけ囁き、精一杯身体を捻ってムチュッとキス。拓弥が驚いて胸を揉む手の動きを止めると、あかりは自らその上に手を重ねてもっと揉むようにと促してくる。

「ごめんね……。拓弥くんがあんなに嫌がっていたのに、おっぱいの谷間を見せちゃって。あ、あの時……二人で行った服屋さんで拓弥くんに注意された言葉を思い出したら、拓弥クンに嫌われちゃうと思って……急に膝に力が入らなくなっちゃって……」

ニャンニャン言葉を使わない、彼女の本気の告白に少年は凄まじい衝撃を受けていた。

何事にも動じない性格の生徒会長が、皆の前で尻もちをつき、腰が抜けたように身動き取れなくなってしまったその理由が——。

（ぼ、僕のことを意識しすぎたためだったなんて！）

「……だ、だから私。あの時拓弥クンに嫌われちゃったとおもったから……だから、だから私、拓弥クンが助けに来てくれて、ぼ、本当に、本当にわ、私——んはああああ！」
あかりがさらに続けようとした告白は、甲高い自らの喘ぎ声によって掻き消える。

彼女自身があの時のことを思い出し昂っているのか、女体がこれまでにないほど鋭くビクつき始めた。

「そんないじらしすぎる相手の反応に――。」

「好きだよ！ 大好きだよお！ あかりのこと、大好きだよおおお！」

拓弥は再度、自らキスをして後ろからの突入を再開させた。

夢中で舌を絡めあい、唇をねぶりあい、性器同士を交じりあわせる。

そして両手は服の上から彼女の胸を揉む。あかりは最初からこのコスでエッチをするつもりだったようで、ブラはつけていないようだ。

（せ、先輩！ あかり先輩ツツ！ あ、あかり――あかりいいいいっ！）

がむしゃらに彼女を求めた。

性器で、口で、そして両手で、少しでも深くあかりと一つになりたかった。

しかし、この体位で全てを得るのは無理がある。

なにより後ろからの激しい突入に、敏感な女体がずっと耐えられるはずもない。

「つぶふぁん！ も、もう、この格好らめえ――んはあああああぁん！」

一生懸命ウエストをよじる姿勢を維持していたあかりの美貌がとうとう前を向く。

いつまでも切れない唾液の糸で結ばれた桃色の牝舌が遠ざかり、『拓弥くん専用♥』と書かれた首輪が再び視界に入る。中のペニスをきつく絞っていた膣壁たちも本来のなめら

かな動きを開始し、心地よく竿肌を舐めまわし出した。

そんな官能的すぎる猫耳メイドの艶姿と反応に――。

パンパンパンパンパンパンパン！

怒ったような腰の動きが止まらない。

「届いてるよおお！ 一番奥まで！ 拓弥クンのいっぱい届いてるニヤン！」

しかも、先ほどまでは全身で彼女を感じようとしたが、今は責めを最も気持ちいいところ――セックスに一点集中。

こうなると立ちバックの体位は、逆に最も効果的だった。

両手で彼女のウエストをガッチリ掴み、しっかりと両脚で踏ん張りながら猫耳メイドのヴァギナを激しく貫きまくる。

奥の奥までたつぷりと詰まった蜜肉は、彼女自身が両脚を肩幅に開いて立っているため力が籠り、常に一定以上の締めつけを維持していた。

そのギュッと詰まったトロトロの濡れ肉を、亀頭で掻き分けペニスを丸ごと埋めていく快感に背筋が震え、ますます腰の動きが加速する。

「あああん！ は、激しいッッ！ 拓弥クン、激しすぎるにやあああん！」

振り乱される赤いロングヘアが視界に入り無意識に前を見ると、ガラス窓にうつすらと恋人の全身メイド服姿が映っていた。



(こ、この格好……やっぱりエッチすぎだよおお！)

自分の突入に合わせてタイトなメイド服をパツパツに張りつめさせながら、ビッグバストが揺れまくっている。ミスコン時には容易くボタンが外れてしまった癖に、今はどれほど大きくバルンバルンと弾んでも、そのコスプレ姿をキープしていた。

「ツツツツツ！」

脳裏に先ほど彼女から聞いた告白と、あの時の自分の感情が鮮明に蘇る。

彼女に対するこの身を焼き尽くすほどの恋情と、その熱さに比例した独占欲。皆の称賛。好奇の視線。それに伴う己の嫉妬。

拍手。歓声。あかりの想い。

イライラ。ムラムラ。そしてドキドキ。

さまざまな光景と感情がぐちゃぐちゃになって、少年の胸を一杯に満たし、

「あ、あかりは僕のモノだ！ 僕だけのものだからね！」

無意識にそう叫んでいた。

頭ではなく、心の奥底からの叫びだった。

そして身体が牡の本能のみの動きに特化する。あかりに対する諸々の感情が全て獣欲に変換されて、がむしゃらに女体を貫くエネルギーと転化していた。

腰の一振りごとに、婚約者の肉体に己の肉の感触を刻み込む。

「わたし、拓弥くん専用だから！ わたしの全部！ おっぱいも、お尻も、アソコも！全部、拓弥くん専用なんだからあああ！」

あかりのセリフが、そして彼女の首で揺れている『拓弥くん専用♥』の首輪が、少年の若く青く、深い激情をそのまま男としての満足感へと昇華させる。

「ああっ！ イクっ！ イクよ！ 中でイクからね！ あかりの中にいくからね！」

「うん！ いっぱいだしてええ！ あかりの中に拓弥くんの赤ちゃんの元をいっぱい注ぎ込んでええええっ！ あかりにいっぱい種付けしてええええ！」

赤髪の上で激しく揺れている猫耳とティアラに、このセリフが牡の欲情をさらに上乗せ。力一杯両手を引きつけ、ミス春海学園の身体を左右に引き裂くような勢いで、

「ああっ！ あかりッッ！ あかりいいいいっ！」

思いつき腰を突き入れ動きを止めた。

少年の薄い尻がブルリと震えたその直後、熱く煮えたぎった激情が全て精液に凝縮され、細い尿道内を一気に駆け抜けていく。

どりゅん！ どぎゅどぶどぎゅどぶん！ ドブどぎゅどぶん！

猫耳に首輪までしている相手にバックから生ハメ膣内射精をしていると、本当に『種付け』行為をしているような気分になせられる。

「あああっ！ 拓弥くんのが奥ででてるう！ 私の中で爆発してるううううう！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takentí Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
**好評
発売中**

**少女天使の暴走が
平和な学園生活を破壊する!!**
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

思春期なアダム4 聖域の崩壊
[小説: さかき傘 / 挿絵: 天海雪乃]



全国書店で
**好評
発売中**

**クトゥルフの娘たちが
学園祭でメイドさんに変身!?**
ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

魔海少女ルルイエ・ルル2
[小説: 羽沢向 / 挿絵: ヒエール☆よしお]



全国書店で
**好評
発売中**

呪詛喰らい師2
[小説: 蒼井村正 / 挿絵: 或十せねか]

**凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に墮とす新たな敵の登場!**

既刊LINEUP

● 全国書店で好評発売中 ● 不死の吸血鬼がDSの主人公様を募集しているようです

● 仙酔学園戦姫ノブナガリ ①～③

● ビルグリムメイデン ①～③

● 思春期なアダム ①～③

● 呪詛喰らい師【カースイーター】

● 女幹部メル様のセカイ征服計画!

● 借金お魔クリス ①～③

● 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです

● 宇宙海賊学園ブラックキャット

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ドコパビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ!

あとみっく文庫

検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利! 来かねる場合がございます。メールの場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic-alkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

二次元ドリーム文庫165

エロデレ
誘惑お嬢さまが恥じらう時
【電子書籍版】

著 者

筆祭競介

装 丁

マイクロハウス クリエイティブ事業部

発 行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコビル1F

●編集部 TEL.03-3551-6147 / FAX.03-3551-6146

●販売部 TEL.03-3555-3431 / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Keisuke Fudematsuri 2010

当ファイルは、二次元ドリーム文庫「エロデレ 誘惑お嬢さまが恥じらう時」
(2010年8月20日 初版発行)に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>